

伝法・中村町の
ほおなでの槇まき

昭和六十三年五月五日号

約十五年ぐらい前まで、伝法中村町に二抱えもある大きな槇まきの木が、道端に茂っていました。里の人々はほおなでの槇まきといって大切にしていました。

ほおをなでる木

昔、村の人が夜おそく一人で槇まきの木のそばを通りました。この付近は家がなかつたので、夜になると通る人もなく気味の悪いところでした。

村人が槇まきの木の下来て来ると、突然だれかがうつつとほおをなでました。はっとした村人は、真つ暗な道を夢中で走り、家の中へ駆

け込みました。そして、何も言わずにガタガタ震えていました。

心配した家の人がよく聞いてみると、「槇まきの木の下で、怪しいものにほおをなでられた」と言うのでした。

このことはすぐ評判になり、「私もなでられた」「おれもだ」と言う人が大勢でってきました。その後も、ほおをなでられる人が何人も続き、お化けに違いないと言うことになりました。それから、だれ言うことなく「ほおなでの槇まき」と呼ぶようになりましたが、お化けの正体を見定める者はありませんでした。



確かに枝が垂れてたよ

渡辺初蔵さん(吉原上中町)

吉原上中町の渡辺初蔵さんは「榎の木は玄龍寺の南側にあつて、高さが七呎ぐらいだつたな。確かに枝が垂れてたよ。榎の木があつたあたりは今でこそにぎやかだけど、昔は一面畑で寂しいところだつたもんだ。当時の子供たちはみんな恐がつたよ」と語ってくれました。